八年間積み上げてきたもの

金屋中・２　伊藤　大埜

「一番。」
「はいっ。」
小学四年に上がる前の春休み、空手の黒帯へ昇段する試験に合格した。
姉は二回試験を受けて合格している。僕は、姉が自分の空手の目標だった。身近にいるが遠く感じる。そんな、なにもかもが自分より優れている姉。その姉より少し上回った気がして僕は小学生の間、ほとんどそのちょっとしたことで舞い上がっていた。
その合格から四年。今年の春、黒帯のもう一つ上の段へ昇段するための試験を受けた。
僕はまだ、姉を上回っているという自信と、この試験へ向けての練習の中で失敗してしまったところをまた失敗してしまうのでは、という不安と、たくさんの気持ちがあった。
中二という、悩んだり考えごとをたくさんしたりする年。その時期にこの試験を受けるのは、今考えてみればとてつもないことだ。無数の技術、経験、アドバイス。そのすべてを出さないといけないとなると、頭が追い付かなくなる。試験場は名古屋なのだが、そこまでの道中も、めまぐるしく考えを巡らせた。習ってきたこと、ポイントを復習し、自分をかき立たせてはみるが、不安が出てきて頭の中はてんやわんやになっていた。
そのうちに試験会場に到着したが、その道中で考え込んだせいで疲れたり、緊張でお腹が痛くなったり、自信をもち直したり、不安が押し寄せてきたりがずっと続いた。考えること、やらなければいけないことが多すぎて頭が真っ白になってしまった。
気を改めて、試験前の練習を始めた。その日はいつもより調子がよいように感じ、たまたま近くにいた先生に少し直されたものの、
「いいんじゃない。」
と言われ、心が軽くなった。その言葉で自信も取り戻した。それまで考えごとをし過ぎてしまっていたから、先生のその一言がとても自分の助けになってくれた。この試験前の練習時間は、自分に自信と勇気をくれた時間になった。
審査をしてくださる先生が、受験者、その保護者の人に対して挨拶や試験の説明を行った。その間、僕はさっきの練習の時にもらった自信と勇気で、緊張と不安を乗り切ろうと必死だった。
そして試験が始まった。試験は黒帯になるために受ける人もいた。僕は一つ上の段に上がるための試験だったため、座りながら自分の番が来るのを待っていた。
一つ目の試験内容は「基本」。これは全部の空手の技術の基本になるものだ。突き、蹴りなどを決まった順番で行う。僕はいつもの練習で、「これだけは」と先生からみっちり教え込まれていたので、審査員の先生の前でも、いつもと同じようにできた。そのおかげで、二つ目の試験前の待ち時間は緊張に打ち克つことができた。
二つ目の試験は「型」。これはさっきの「基本」を発展させたもので、相手がいると想定して突き、蹴りを組み込んで演じるものだ。「型」には何種類かあり、その一つを行った。もともと、この試験の応募用紙に「当日に行う型は〇〇と〇〇と〇〇の中から発表します。」と書いてあった。そしてその中から選ばれたのは、自分がいちばん苦手で、いちばん難しい「型」だった。
その「型」を演じる順番は間違えずにできたものの、始め、途中、終りすべてで足がぷるぷると震えて、立っているのがやっとだった。そのせいで「型」が終わった後、三つ目、四つ目の試験の記憶がほとんどない。強いて言うならどちらも自信などなく、不安と緊張だけだった。試験の終了後、僕はとても長い時間、頭が真っ白になっ

ていたように思う。
　合否を決めるため、審査員の先生方は会議室へ行き、受験者は休憩の時間となった。僕は自分の足の震えと泣くのを我慢しながら母のところへ真っ先に向かった。
　母は僕の姿から察したのか、何も言わずに僕の頭を優しくなでた。涙がぽろぽろと出てきた。できるだけ音をたてず、声もたてず、思いっきり泣いた。
　それから少しして審査員の先生方が戻ってきた。そして合否の発表。僕はだいたいわかっていた。理解していた。自分の合否を。そして僕の番号が呼ばれることはなかった。
　帰りの車の中で、僕は自分にあきれていた。なぜ全力を出せなかったのか、なぜ過度に緊張してしまったのか。そして僕は自分の姉を上回っているという自信、自分がよくやっているという自信すべてをへし折られた気分だった。それと同時に八年間積み上げてきたものはなんだったのかわからなくなった。たった一回の試験。まだチャンスなんていくらでもあるのに、たくさんのものが崩れる音がかすかに聞こえた気がした。
　家に帰って、自分の合否を家族に言う気にはまったくならなかった。いや、なれなかった。
　それからの春休みはあまり気分が乗らなかった。いろいろなことに気力をなくし続けていった。その時、課題がなくて助かった。たぶん、あったら一つも進められずに提出していたと思う。それぐらい僕は春休みの間、何もできなかった。
　その間の空手の練習は、先生に落ち込んでいると悟られないようにした。できるだけ「キレ」よく取り組んで、なるべく普通をよそおった。
　でも姉から、
「シャキッとしなさい、シャキッと！」
と言われて、少しずつ気力が戻り、生活にも空手にも精が出るようになっていった。
　そして、それから少しずつ自分に自信を取り戻して、本来の自分になってきたと思う。でも、思い込みすぎやメンタルの弱さは成長できておらず、少し他の誰かに何か言われるだけで落ち込んでしまう。
　よく人は、大きな失敗をするとその分成長するというが、それは間違いだと思った。なぜならこの時の僕はまったく成長していないからだ。だからこそ思う。僕はその失敗を次にどう生かすのかで、成長の度合いが変わってくるのだと。今回のことを経験して思ったことは、自分の精神というものは、失敗の大小にかかわらず、次への生かし方で強くなっていくということだ。この失敗を生かしつつ、次の自分へつなげていきたい。

4・9